昭和39年11月10日第三種郵便物認可　昭和41年4月5日国鉄東局特別扱承認雑誌第2343号　昭和42年6月1日発行第4巻第6号通巻第34号(毎月一回・1日発行)

月刊漫画 ガロ

No.34
1967
6月号

カムイ伝㉚

赤目プロ作品
白土三平

（前回まで）

カムイ伝㉚

正助らが中心となってすすめていた新田開発は、その間、幾多の難関や障碍を重ねながらも、いまようやくその成功をみた。人々は、おのれらの血と汗とによって、嘗つて荒野であったそこから、初の水稲と棉花の収穫を得たのであった。水稲の収穫にともなう歓びはもちろんであるが、ことに百人手間と言われる棉作においては、それだけに人人の感激も大きく、はかりしれなかった。そのうえ、棉作については、すでに正助の研究があったとはいえ、計画的に栽培されたのは日置領内においては初めてであり、商品作物であるという性格からいっても、その収穫にことさらの意味があったのであった。それは、商品作物が、その生産を通じて百姓をして自動的に市場とつながりをもたせ、そのことによって、百姓を単に年貢の負担者と権力による搾取者という支配関係に全幅的に依存させることから放たせ、それだけ自力をつけさせるものだからである。

この意味で、商品作物の開発は従前の農業に比して革命的であるが、他面では、市場などの流通機関と結びついてはじめてその価値が生産者に還元されこそすれ、繭にしろ、棉にしろ、生産されたそのままのものでは、飢えの足しにもならぬという特殊性をもっている。その実例を正助は、棉の一大産地といわれる摂津、河内において、まざまざと見ているのだった。それゆえ、商品作物を栽培しながら、どのようにして、飢饉や、考え得る悪条件の中を切り抜けるかが、これからの生産者の課題でもあった。

新田開発による収穫は、単に米や棉だけではない。開発工事、作物の栽培作業を通じて人々の協力関係、ことに非人と百姓とのそれがより強まったことは、新田開発本来の目的に副次的であることをこえて、大きな収穫に数えられようし、非人らが真に生産する者の歓びを知ったのも、おそらくこんどが最初であったに違いない。この貴重な体験は、この後の彼らをその内側から揺るがすものであろうし、やはりこのこともその一つに数えねばならないだろう。

しかし、新田からの収穫を得て、少しばかり豊かになりかけた花巻村を、藩でははやくも窮乏財政をつくろう好餌として注目していた。新たに田畑を切り墾いた者には、その土地に限り数年間の年貢を免除する通例であったが、それを破って鍬下年季（上記特権）を縮めようと謀ったのである。やがて役人が開発地に測量の足を踏み入れたころ、当の正助は、他国に向かって旅立っていたのであった。

月刊漫画 ガロ 六月号 目次

表紙絵・白土三平

カムイ伝

第30回

赤目プロ作品　　白土三平

（後 記）

まずおことわりしておきたいのは、話がだいぶ飛躍してしまったことである。

当然今回は、花巻村新開地の新田畑に対する領主側の干渉に対して、百姓たちの本能的な感情から起きてしまった突発的な騒動の顚末と、他領の棉作地と、飢饉時における状況の見聞に向かった正助の思わぬ危機の場面から、物語をはじめるべきであるが、種々の事情から、かくなる結果になってしまった。これらは、次回にゆずりたい。

いつの時代においても、支配者というものが、民衆のために心を配ったり、救いの手を差しのべてくれるなぞと思ってはならない。権力者は、たえず、おのれのことのみを考え、おのれの階級の利益と保持のためにのみ、民衆について気をつかうのである。

支配者の言うことは、一つとして信じられるものはない。彼らが口にするヒューマニズム、平等、自由、平和、独立、秩序、道徳、愛国心等々は、われわれのものではない。すべて彼らの支配のための、それを維持するための方便にすぎない。

かつて支配者が、おのれらが存在するということの矛盾を避けるために、いかに民衆に犠牲を強いたかは一々例をあげるまでもないが、念のため、最も責任を回避されやすい天災の、しかもその中のほんの一例をあげれば、弘前藩における元禄八・九両年の凶作においては、十余万人の餓死者をだし、疫病で死ぬ者数万人、空屋が七千戸にも及んだという。

天明の大飢饉においては、同三年四年にかけて、領内の餓死者、男・四万六千八百八十二人、女・三万四千七百九十六人と記されている。また、斃れた馬・一万七千二百十一匹、荒田・一万三千九百九十七町五畝二十三歩、荒畑・六千九百三十一町八反五畝二十四歩、という数字が上がっている。これは、その一部の例である。これを天災といってかたづけることのできないのはもちろんのことである。

というのは、現代の賃金形態による抽象的搾取支配の資本主義社会においても、彼らは、口には民主主義を唱え、自由を叫び、人類愛を主張しながら、かつて世界に頻々と起こった恐慌時において、彼らはおのれらの保持と発展のため、民衆に何を強いたか。

賃金の引き下げ、馘首、労働強化、労働条件の改悪、権利の侵害、増税、インフレ、そして弾圧。

彼らは、民衆の犠牲のうえに恐慌を乗りきり、この犠牲によってのみ、拡大再生産を可能ならしめたのである。そしてさらに、戦争……。

いったい、民衆が起こした戦争があっただろうか。つねに戦争は、彼ら支配階級の存立と矛盾の打開のための、さらにそのために人々におびただしい犠牲を強いてまで、用意され、実行される手段なのである。彼らは、おのれらのためには、どのような手段も辞さない。そのために唱えられる愛国心などというものには、絶対に惑わされてはならない。

一方において飢え、他方においてそれを傍観した幕藩体制の中から、愛国心の伝統は見出せない。愛国心は、支配者によってこしらえられた言葉である。しいて言えば、おのれらの夢を追求し、自由と権利を主張し、権力者と闘い続けてきた人々の、闘いの中にのみ愛国心の歴史と伝統をみるべきであろう。

目安箱㉗

「防衛」について

上野昂志

われわれの国にあるとかいふ「小軍隊」がもし実在のものとすれば、それがすでにいくさの部分なるがゆゑに、あきらかに地上の悪にほかならない。おそらくこの「小軍隊」の組織は、どこにも敵があらはれなくても、われわれの国の人民をみなケダモノ化するやうな方向に拡大して行くだらう。

石川淳『芸術家の人間条件』

　右のエッセイは昭和27年4月に、あるいは3月に書かれたものだが、あのころは「実在」することを認めるかどうかが論点となった「小軍隊」が、今では「実在」を認めないことが非現実的とされる。のみならず、今年国防会議によって出された三次防計画（第三次防衛力整備計画）では約二兆四千億円という巨額の金を要求している。これは37年度から41年度までの二次防の約二倍にあたるというが、額が大きすぎてピンとこない。ただ標準公団住宅だったら百二十万戸以上が建つほどの金である。そして、この国の人民の支出という点から見れば、一人当り二万四千円だすことになる。こういったら、普段は関係なく見える「小軍隊」と私たちが、どれほど密接に結びついているかはっきりするであろう。この巨大な金を兵器の更新、兵器の国産化・研究開発にあてるというのが三次防計画の骨子だが、当然のことながらこの計画実施を渇望しているのは、最近輸出の伸び悩みに苦しんでいる産業界である。

　三菱重工は50億円かかる超音速ジェット練習機の開発を決意して、防衛庁、大蔵省に予算の裏づけをするよう働きかけているそうだし、35ミリ高射機関砲をつくる日本製鋼所、81ミリ迫撃砲弾をつくるダイキン、対潜飛行艇をつくる新明和工業、対潜しょう戒機「P2V改」の量産をする川崎航空機等は設備投資にかかっていることである。（朝日新聞・2月11日朝刊）

　正当の権利を有するものと認知されようがされまいが、一度できてしまえば子供は育つ。自衛隊という名の「小軍隊」とても同じことだ。2月13日から3月8日まで朝日新聞朝刊で『自衛隊』という特集をやっていたが、それによって日頃私たちがその「実在」を忘れているのとは逆に、自衛隊の方では、常に「国民」という存在を意識しているという事を知った。私たちは否応もなく金で自衛隊と関係を結んでいるが、自衛隊が望んでいるのは金だけではないらしい。「国民」の心が欲しいというわけだ。「国民」との一体感を得るために「国難」でも起こってくれたら、というようなことを口走るものもあるという。「国難」とはまた御大層な言葉だが、それは一体如何なるものか、即ち、自衛隊好みの表現でいえば「国の防衛」とはどのよ

うなものか。そして、そのことと私たちはどのような関係にあるのか。

石川淳が既に指摘しているように、現代では平和と戦争とは対立概念としての意味を失ってきている。日本は「平和だ」といわれるが、そしてそのように見えもするが、現実には平和でも戦争でもない、あるいはそのどちらでもある状態にある。これは何ら抽象的な観念ではない。例えば、東京周辺にはミサイル基地が四か所ある。ここでは対空ミサイルは発射台にすえられ、常に発射15分前の態勢におかれている。レーダーは四六時中目標捜索をしている。即ち、「常時臨戦態勢」ということだ。基地の中はこのような状態だが、基地の外ではアベックが小春日和を楽しんでいるかもしれない。つまり戦争と平和が同一平面の上にある。そして同一平面上にある限り両者の関係は量的なものである。「小軍隊」がふとれば、平和はやせる。アベック二人の防衛費四万八千円分だけ、彼らの味わう「平和」な春は残り少くなっているはずだ。何故なら、現代においては軍隊の存在それ自体が「平時」を「有事」に変えているからだ。といえば、「否、自衛隊は敵の侵略を防ぐことによって平和を守っているのだ」という反論がはねかえってくるだろう。だが、「侵略」する「敵」とは何か。

自衛隊と在日米軍との24時間待機は、グリニッジ標準時によってハワイの24時間待機に結ばれ、さらにハワイから東南アジア、アラスカ、ワシントン、欧州へと網の目のようにひろがっているそうである。グリニッジ標準時に従って記録されるということによって象徴されるように、この「常時臨戦態勢」は世界戦略体制の一翼を荷っているのである。ここにおける「敵」とは、アメリカ風の表現でいえば、「自由を脅かすもの」であり、自衛隊の「想定」によれば「赤国」である。「赤国」といえば、まるで外部の「敵」のような感じを受けるが、自衛隊にとっての「敵」はそれだけではない。

「潜在的な間接侵略部隊は、もうとっくに上陸ずみだといえる」と、中堅どころの幹部がもらしたのを聞いた。

「なぜなら」と彼はいった。「間接侵略の火付け役になるのは国内の革新分子ですからね」

同じ意味の言葉を海上自衛隊でも航空自衛隊でも聞いた。みんな似た表現であった。

(朝日新聞・2月24日)

「敵」は国内にもいる。「革新分子」、「急進分子」が集団を作り「暴徒」と化せば、徹底的に「制圧」するという。

レーダーに一個の点としてうつる「敵」を撃ちおとす時、指示を下す管制官も、ロケット砲のボタンを押すパイロットも気楽であろう。いや、それ以上に、彼らの胸には「国難」を救うという「愛国の熱情」が湧きたっているかもしれない。しかし、「侵入禁止線」を突破してくる、自分と同じ言葉をしゃべり、同じような顔付きをした「暴徒」に小銃の照準を合わせ、引金をひく狙撃手はどうであろうか。

その時、彼が銃によって守っているものは一体何なのか。彼の国か、生活か、それとも幻想の中に「実在」する秩序か。

自衛隊という、この抽象的な存在にとっては、秩序という幻想こそ守るのに似つかわしいものであろう。だが、「侵入禁止線」を突破してくる「暴徒」が、この世界において守るべき何物をも持たない存在だとしたら、それを狙い撃つ狙撃手ひとりひとりは、守るべき何を持っているのか。

(67年3月17日)

日本忍法伝

第20回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第16章 吉野八荒

(一)

秋であった。

夜ごと昇る月は日と共に丸くなる。

紅葉は、わずかの風にもハラハラと散る。

音だけ聞けば、それは夜降る雪にも似てわびしくも静かな風情であった。

いまも——月あかりのすだれに、ハラリと一葉、赤児の手の如き紅葉がちりかかって、とまり、あざやかな模様をつくった。

白い手が、その模様をいとおしむかのように静かにそのすだれをなでた。

女のような指。働くことを知らぬその指の持ち主は、古人皇子である。

頭をそり、墨染めのころもに身をつつみ、仏法に帰依した元の皇太子・古人皇子である。

夢かまぼろしのようなあの一日、いや一刻か二刻の出来事が、いまも皇子の脳裡にこびりついてはなれぬ。そして、その日から今日までのわが身の変わりようについても……。

草むらにすだく虫の声すらが、皇子の運命を思わせて哀れであった。

吉野の山は八日月、冬のけはいがはや忍びよる。

中大兄が皇太子につき、大化の改新の大号令は大和朝廷の勢力の及ぶ津々浦々にまでとどろき渡ろうとしているきょうこのごろ、みずから頭をそり出家した古人皇子は、この吉野山頂の庵にうつりすんだ。

それにしても想われるのは、いまだ都に住む一人の娘・倭姫のことである。古人皇子の娘・倭姫は、あろうことか中大兄皇子の妻であったのだ。

(さぞや、つらい思いを耐えていることであろう)

古人が倭姫の黒い瞳を思ったとき、目の前をまた一枚の紅葉が散った。

「おききしたいことがございます」

紅葉が口をきいた。いや紅葉ちりしく地面に深く頭を下げた影の声であった。

「世を捨てたわたしに、何をきこうというのか」

「あなた様が、あの日言われたことばの意味を——」

「あの日いったわたしのことば?」

「はい。韓人、鞍作臣を殺しつ――
ということばの意味でございます」
「おお」
思わず古人はよろめいた。考えてみれば、今の自分のこの暗い運命は、いわばそのことばによってきめられたのではなかったか。
胸に岩石をのみこんだような重い感覚の中で古人はようやく次のことばをさがした。
「その方、何と申す」
「はい、弓月と申します」
影ははじめて顔を上げた。八日月に弓月の顔は彫り深く影をうつしていた。
「弓月か……志能便よのう」
「おことばの意味を」
「口は……」
といって古人は一度ことばをのんだ。
「……人の運命まで決めることがある――あのことばの意味はそれだよ。お前も気をつけるがよい」
いいすてて古人はパッと奥へ入った。わずかの風に、すだれの紅葉がホロリとおちた。
瞬間、弓月は、大地をけって庵の屋根へとんだ。とたん、ビューッ、風と共に散りしくおちばがまい上がり、その葉の中に、弓月はまごうかたなき人影が浮かぶのを見た。
「鳥――とはそなたの父であったな」
人影はいった。
「何者！」
人影はうすく笑った。
「韓の志能便・垂」
「韓忍者・垂……」
はじめて聞く名前だ。が、考える間もなく闇をきって白刃が舞った。
「とっ！」
庵の屋根をけって空へ……一回転……さかさおとしに地へ――この間に垂となのる影は一気に大地へとんだ。白刃を空へ向かって立てる。が、弓月は、白刃すれすれのところで紅葉の枝にとりすがり、その弾力を利用してはね上がりざま、ピッピッピッ松葉手裏剣を雨の如く降らせた。
「あざやか」垂がいった。
とそのことばのおわらぬうち、垂の口からゴオーッと風をまいてほとばしる紅蓮の炎。その炎は、あっという間に弓月の着衣を焼いた。ドシッ、火にくるまっておちた弓月、すかさずその炎の真中に垂の刃が……。
が、一瞬、その垂の背中から腹へ、弓月の剣がドスッとくいこむ。
ぐっ、血をかむような声と共に、おどろくべし、韓忍者・垂は、弓月の剣を背中にさしたまま、庵の屋根へとんだ。
追おうとした弓月に、どっと降るぬるぬるとした液体。血だ。垂の口から血が降ったのだ。
「又会う。弓月」
垂の姿は、そのまま八日月の影と消えた。
ぼうぜんと弓月は立ちすくむ。素裸の弓月のからだは、顔から胸まで、とっぷりと血ぬられていた。

（二）

キッキキッキッ、とつぜん鳴いたのは野猿の子ででもあろうか。
が、吉野山のしじまを破ってきこえるのはまごうかたなき人間の赤児の声。
昼なお暗き森の中に、丸太をくみあわせ、つたでゆわえただけの小屋があった。赤児の泣き声はそこからした。

「八雲たつ
出雲白雲
海にたつ」

一つおぼえのその歌と、まだ幼なさののこる声は額田王の声。そして、赤児をあやす母の声は玉櫛の声にちがいない。母ならぬ母、弓月の子を産みおとして死んだ若菜のたのみを入れて、玉櫛はその子を育てる決心をしたのだ。
寒い。忍者の弓月にさえ、山の冷気は身にしみる。わけても、あの血を洗うため谷川の水を浴びたあとなのだ。弓月の身体からはキラキラとまだしずくが垂れていた。
しかし――おれには帰る家はない。
月明に小屋をみながら弓月は思う。あの日から一言も口をきいてはくれない玉櫛――長い間心に秘めて来たその面影が、今これほど間近にいるというのに、弓月はその玉櫛のあたたかさをまだ知らなかった。何故か玉櫛に近づくことははばかられた。
弓月は、そっと小屋近い大木の下の落葉の上に、身をちぢめて横たわった。

月は傾き、星はうつる。ふと弓月はサラサラと落葉をふむ足音をきく。が、黙って目を閉じつづける。

足音は弓月の近くまで来て立ちどまった。そして、やがて、フワリ、弓月の上にやわらかい衣がおちた。

サラサラと足音は遠ざかる。

「玉櫛！」

足音は、一瞬止まって、そしてかわらぬ歩調で静かに去る。

なぜ、おれは声をかけたのだ——後悔が胸をつく。弓月は衣のやわらかさを玉櫛のぬくもりとして抱いた。

（三）

わあーっ、があーっ、

数百人が一時にあげるときの声。

そして、どどっと津波の如くかける数百騎の騎馬の群れ。

あかつき近き飛鳥野（あすかの）はとつぜん眠りからさまされる。

しかし、飛鳥の都に住む人たちは、それを夢うつつのうちにきいて、まだ眠りのなかにあった。——また、やってる。——一度はめざめても都人たちはそうつぶやいて頭を枕からあげようともしないのだ。

あの大極殿の政変以来、これは毎朝のことであった。すべての人がもうあきらめ、あけがたのざわめきになれていった。

どどどっ、わぁーっ、

飛鳥野の露を払ってかける騎馬数百——、白布（しらぬの）のひきいる能登軍団が今朝も訓練に余念がないのであった。

三百年、いや四百年前、こうして九州から攻めのぼった騎馬民族の祖先たちが、馬蹄に出雲族をたちまちけちらしていく姿を頭にえがくたび、能登軍団隊長白布の若い胸はひとりでに波うった。

（おれの時代、ちっぽけな闘いしかなくなってしまった。くそっ！）

だから弓月はことさらに先頭で荒れまわりあばれまわって汗を流すのだ。

そのころ、皇太子となった中大兄（なかのおおえの）皇子は、かたく開かぬ妻の倭姫のからだを殴りつけていた。

「それほどおれがにくいか。バカモノ、にくむなら、そなたの父をにくめ。父の軽々しい口をにくめ」

倭姫の白い肌を殴りながら、中大兄はうすら笑いすらうかべて話す。話すうちに自分が自分の言葉に酔い、古人皇子に対する怒りがより大きくなってくる。

「バカな！ おれがせっかく騎馬民族の征服王朝をかたく守らんとしているのに、貴様の父は不覚にもわれらの正体を暴露する如き言葉をつぶやく。『韓人、鞍作臣を殺しつ我心痛し』とは何だ！ 『韓人』とは何だ！ ああ、おれたちが韓人だからこそ、おれは苦労しているのではないか。それを貴様の父は——開け！ お前はわしの妻だ。夫に向かってからだを開くのがあたりまえだ、さ！」

倭姫のからだはかたかった。目はとじ、その白い肌は陶器の如く動かなかった。

ガタッ！

そのとき、中大兄の部屋の帳に何

かがあたった。はっとしてふりむいたとき、中大兄はそこに白刃がつきたてられて黒い影を見た。韓忍者・垂であった。

「垂か……」

「わが君、古人皇子に謀叛のくわだてあり」

一瞬、中大兄の唇がゆがんだ。それは不気味な笑いであった。

「そうか、証拠ありや」

「弓月と申す忍者と古人は毎夜の如く吉野の庵で」

「よし、それだけで充分——垂、その身体でまだ動けるか」

「なんの、これしき」

「うむ、ただちに白布と大海人皇子を呼べ。この機に古人皇子を殺すのだ」

「はっ」

声と共に影は消えた。

ツーッと、倭姫の目尻から涙が一筋つたわって、白いしとねににじんでひろがった。

「きいたであろう。そなたの父はわたしが殺す。殺すのだ、おれが、な」

中兄大の血は妖しくさわいだ。そのまま、中大兄は陶器のような倭姫のからだをくだけよとばかり犯しはじめた。

（四）

飛鳥から吉野へ——能登軍団の騎馬隊は土けむりをあげて突進した。

その中にあって大海人皇子は、ひとり暗い心でたづなをあやつった。

（世を捨てた古人皇子を何故殺さねばならんのだ。おれには兄上の心がわからぬ。それにいまおれの横で喜びいさんで馬を駆るこの白布という男——まるで血に飢えた狼のようだ。おれには出来ん）

最後のことばだけが口から出た。ぱっと白布がふりかえって、ニヤリと笑った。美しい歯並びが秋の陽ざしに、美しいだけに不気味であった。

大海人は目をとじて馬に鞭をあてた。そして白布のつぶやきを馬蹄の中にきいた。

「いくじなしめ！」

古人皇子は弓月のことばをきいても動こうとはしなかった。いずれこうなることはわかっていたような気

がする。いやむしろおそすぎたのかもしれない。
「弓月とやら、お前は早く去れ、わたしのまきぞえをくうことはないぞ」
「はい」
答えたものの弓月も動かなかった。一切ののぞみが消え、玉櫛すら心を開いてはくれぬ。（おれはこのひとと一緒にここで死のう。そうだ、闘わず、古人と共に、白布の馬蹄でけちらされたら……さぞいい気持であろう）
やけくそでそう思ったのか。いや、そのとき弓月の心は澄んでいた。吉野山にかかる月の如く澄んでいた。
（そういえば――今夜は十三夜のはずだな）
「にげましょう。玉櫛」
額田王はしきりに玉櫛の手をひっぱる。
「広い日本だもの、どこかに赤ん坊と三人でおちついて暮らせるところがあるわよ」
玉櫛は首をふる。そんなところがこの日本にあろうとは信じられない。出雲族の娘として屈辱に生きて来た玉櫛には額田王のような夢は、とうの昔にくだけ散っていた。
しかし――この子だけは。胸に抱かれて無心にねむる赤児の顔をみると玉櫛の心もぐらつく。若菜さんのためにも……そうも思う。
「いきましょうよ」
ふたたび額田王が手をひっぱる。心の弱さがからだの弱さとなって、玉櫛はズルズルと立ち上がっていた。

能登軍団八百。噴き上げる火山の煙の如く古人の庵めざして一直線！
鳥はおどろき、猿は梢を走る。白布の胸は半年ぶりに快感にふるえた。
――が、めざす庵は深閑として声なく、どどっ、能登軍団とくいの包囲戦術にも何らの応えがない。
「くずせ！」
白布の命令一下、騎馬隊の手からとんだ投縄は庵の屋根に柱にまきついて、そして、どどっ、騎馬の疾駆と共に一気に崩壊――土けむりの中で、白布は、庵の床に静かに坐る二人の人の姿をみかけた。
古人と、そして弓月である。
（中大兄め、またおれをこんなちっぽけな闘いにつかいやがる）
怒りは、じっと坐る二人に向けられた。
「つっこめ！」
わあーっ、ときの声と馬蹄は地軸をゆるがして、八方から二人に迫る。
――ビッビッガッ！　肉にくいこむ鞭、刃、そしてつきころがす馬の勢い。弓月はなぜかにんまりと笑って横の古人をみた。ころがった古人は身じろぎもしない。死んだのか、もう。攻撃は果てずくりかえされた。ビッビッピシッ！　鞭が八百の鞭が一気に襲い、剣が肉を裂き、血がほとぼしる。
おれも、もうすぐ死ぬ。ビッビッピシッ！　頭上を五頭、十頭、馬がとびこえ、馬蹄が顔をうつ――これでいいのだ。
が、しかし、なぜか弓月は全身の筋肉が奇妙にゆれうごくのを感じる。攻撃に対して、敏感に反応しようとする忍者のからだ。うごくな、死ぬのだ、おれは――が手足だけが動く、それが忍者としての悲しさなのか。
弓月はいつか立ち上がり、襲って

来た能登軍団の一人の剣を奪った！

「くるか、弓月」

白布の剣が迫る。どどっ、一瞬、馬腹を下からなであげ、かえす刃は左右から来た敵を刺す。

がおーっ　猛獣の怒りにもにた能登軍団八百の声は吉野山にこだまし、自分の意志とは関係なく荒れ狂う弓月を中心に、それはよせてはかえす怒濤の如くであった。

その中で、古人のからだは、首が手が、足が、バラバラに切りきざまれ、流れる血汐は大地を染めた。

いまはもう、弓月は何が何だかわけがわからなかった。汗が血が、目に入り、しみる。果てることのない能登軍団の襲撃のくりかえしの中で、弓月は完全に忘我の境地にあった。白布もまた、そうであった。やっと、おれと対決する奴に出あった。しかも白布には必ず勝てるというよろこびもあった。.何といっても八百対一だ！

しかし、ひとりみずからを捨てきれぬ男がいた。大海人である。大海人は乱戦の中をそっとぬけ出して、吉野の原始林に馬をのりいれた。

庵は燃えていた。

その火を森の彼方にみつけると、玉櫛の足はとまった。

「どうしたの？」

額田王がきいた。どうしようというわけもなかった。ただその時玉櫛にはこのまま焼けて死んでいく人があわれであった。玉櫛はだまってひきかえしはじめた。

「玉櫛！――もうしらない。私一人で行く」

額田王はくるりと身をひるがえすとひとり走り出した。そしてとつぜん、木々の間から出て来た一頭の馬におどろいた。「あんた……」馬上に顔をふせていたのは大海人である。

「しばらく」

額田王のつぶらな瞳が笑った。とたん大海人はパッと馬からおりるとやにわに狂ったように額田王を抱きしめた。額田王はしばらく抵抗して、やがてやめた。「好きなの？」ぽつりといってそれから幼ない瞳をとじた。

玉櫛は血みどろの弓月の上に覆いかぶさっていた。いつか雨が降りはじめていた。焼けあとに血にまみれて横たわる男をみたとき、玉櫛ははじめてこの男に生きていてほしいと思った。

うすい玉櫛の衣を通して雨がしみた。その雨の音の中に、どどっ、飛鳥のみやこめざしてとおざかる騎馬群のひづめをきいて、玉櫛は弓月の顔の血をなめた。

（つづく）

カムイ伝が第1回から入手できます！

愛読者の渇望に応えてバックナンバー再版

第1冊～第3冊(第1回～第6回) 頒布中！

非人カムイを絶望的な状況に陥れた因子は何か？
悲劇は、カムイ出生のときすでに始まっていた。
早やも二年余の歳月を数えた白土三平先生畢生の
大作「カムイ伝」を第1回からこの機会にぜひ！

―カムイ伝再版促進会―

カムイ伝の第1回から第10回までを5分冊にして再版しています。第1冊(カムイ伝①②) 第2冊(③④) 第3冊(⑤⑥)は既に頒布中で、第4冊は4月下旬、第5冊は5月下旬に発行の予定です。これは、希望者頒布・限定出版で、書店では発売いたしませんので、再び品切れとならないうちに、今すぐ直接下記へお申込み下さい。未刊分のご予約も受付けております。

頒価 各冊 **230円 〒20円** (切手も可・但し1割増)

申込先・東京都千代田区神田神保町1－55 **青林堂**内 **カムイ伝再版促進会**

〈ガロ〉特別セール案内

バックナンバーの部

今、全国で爆発的な人気を呼んでいる白土三平の大河マンガ＜カムイ伝＞は39年12月号から本誌に連載されていますが、これをはじめからお読み下さる方々のために、バックナンバーの特別割引セールを実施中です。

「カムイ伝·在庫セット」
41年4月号～42年1月号
10冊・1組 特価 1,300円
(〒1組・100円)

セットのほかに、1冊でも分売いたします。ただし、品切の号もありますのでお問合せ下さい。

新刊予約の部

月刊雑誌“**ガロ**”を、**少しでも安く**、しかも**続けて読みたい方々の**ご要望にこたえて、次の通り**特別予約セール**を実施いたしております。

〈**Aコース**〉　6カ月分予約前納の方には、800円に割引の上、「白土三平傑作選集」(130円) を無料進呈します。

〈**Bコース**〉　1カ年分予約前納の方には、1,600円に割引の上、白土三平の単行本を1冊無料進呈いたします。

★郵便料金の値上げに伴い、今後のご予約には送料(Aコース·100円、Bコース·200円)を申し受けることになりましたのでご諒承下さい。

申込先・東京都千代田区神田神保町1の55　青　林　堂